

「人生」の意義

企業経営漫談士 岡野実空

先行きの見えない時代を反映して、いま書店には多くの哲学書が並んでいます。私もかれこれ半世紀近くそれらの古典や類書を読み、ときには巡礼や遍路に出て、「生きること」や「働くこと」の意義をあれこれ考えてきました。しかし社会や技術の進歩とは対照的に、一向に変わらないのが人間。それどころか、総体的には退化すら感じられる昨今。今回のコラムでは、私たちになじみ深い仏教的な考え方を柱にして、私なりに考えた「人生」3つの意義をお伝えします。

その1:「生きる」

「人生」の意義はまず、この世に生まれた宿命を受け容れ、四の五のいわず「生きること」。自分の意思とは無関係とはいえ、天文学的な確率の競争を勝ち抜き、この世に生を受けた以上、それを粗末にする訳にはいきません。あちこちのお寺で見かける、「子ども叱るな、来た道じゃ。年寄り笑うな、行く道じゃ」の掲示板。それは「生きている」証としての喜怒哀楽はさておき、虚心坦懐にその行程を進めという教えと読めます。

彼のゲーテも「人生において重要なのは生きることであって、生きた結果ではない」と言っていることからすると、古今東西を問わず、まずはしっかり「生き切る」ことが肝要なようです。

その2:「死ぬ」

生まれたと同時に私たちが担う次の宿命は、生の意義をつなぎ「死ぬ」こと。しかし身近で直面することがないとその実感は湧かず、多くの方がそれを意識し始めるのは、人生の折り返しを過ぎてからです。実際、巡礼の寺でしばしば出会う「生死一如」(しょうじいちにょ)という仏語は、「生と死は表裏一体」という意味ですが、中年にならないとなかなかその真の意味を理解できません。

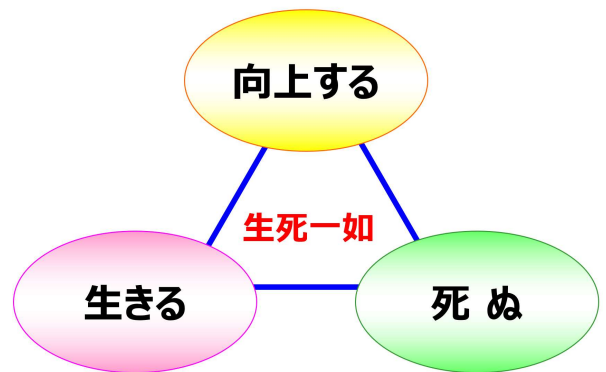
もしそれを知りたいなら、「人生最期の一言」を自問すること。それに対する自答こそ、今後の自分の生き様を仮決めしてくれます。因みに私の場合、職業をリセットした40歳前後であれこれ悩んだ末の結論、「面白かった！」はその後不変です。

これまで何度も死にかけた作家の嵐山光三郎氏。その体験を綴った『死ぬための教養』(新潮新書)には、最期に頼りになるのは宗教より教養と書かれています。それはガンジーの名言、「明日死ぬかのように生きろ。永遠に生きるがごとく学べ」の実践者としてなかなかの説得力です。

その3:「向上する」

「生死一如」に教養が重要なのは、「人生」という貴重な期間に「向上」するためでもあります。それは自分の「成長」によって活動

KM E-1 「人生」の意義



範囲を広げ、多くの人々のために働き、より良い社会の実現に貢献することができるからです。

それは仏教も同じこと。元々は個人の「解脱」を目指す釈迦の教えを弟子や後継者たちが学び、より多くの人々を救うために発展させたものが、現代の仏教。しかもインドから中東、中国を経由する過程でさまざまな要素が加わり、さらに土着の考え方が融合したものが我が国の仏教です。

かつてダライ・ラマ14世が来日し、講演会で宗教の普遍性を問われ、その役割は「地域限定」であり、それを越えるのが「倫理」と言い切ったとき、そこにチベット仏教の法王という立場をはるかに超えた、「世界市民」としての存在を実感しました。対照的に私という「小市民」は、50代半ばに膨大なエネルギーと時間を使い、念願の四国遍路を実現したものの、その成果の問いに、「解脱できないという悟り」としか答えられず、友人たちから大いなる嘲笑を買ってしまいました。

この際せめて、職業人としての記録である一連のコラムが、ここまでお付き合いいただいた皆さんの「向上」に、少しでもお役に立てば幸いです。

2019年5月27日 実空